

千葉県立佐倉高等学校 全生徒のアウトプット機会の最大化を目指した課題研究（千葉県）

実施体制の概要

- 全校生徒数：約960名
(うちSGH対象生徒 普通科約840名を対象)
- SGH対象学科：
普通科約840名を対象とする
- HP：
<https://cms2.chiba-c.ed.jp/sakura-h/>
- SGH委託費用総額：約3,837万円
(H28～R2：約567万円～約1,000万円)
- 校内の体制：「探究学習部」(6名)を発足し司令塔に、SGH実務担当チーム、SGHサポートチームが実行を支援。海外派遣は「国際交流部」と連携。
- 国内連携機関：
千葉大学、東京大学、東京外語大学、筑波大学、国立歴史民俗博物館、国際協力機構、DIRECT FORCE、佐倉国際交流基金
- 連絡先
✉ k.sakura-h2@chiba-c.ed.jp
043-484-1021 (代表)

何を目指したか

探究学習を通してよき学びの体験をし、将来の大きな成長の助走とする

ツールのポイント

- 1 アウトプットが最高の教育機会。発表機会を明確に設定。海外派遣先でも課題研究発表と調査を実施。
- 2 精選して「伝える力」の重要性に気づき報告のワンペーパー化を志向。

SGH事業実施に必要な資源



■ 県費でSGH担当教員を1名増員。全員参加で教員が皆が等しく経験を積んだことで持続性を獲得。



■ SGH予算に加え同窓会の支援も活用したことで海外5か国派遣を実現。また、同窓会の協力で校内Wi-fi環境の整備も果たす。



■ 課題研究の蓄積により生徒、教員双方の「当たり前化」が進み、教員の助言負担が減少、班数の拡大も可能になった。



■ SGH1期生が卒業する1サイクルが終了して、教員の理解が浸透。逆にそれまではやりながら改善する姿勢で相当の「胆力」を要した。

Plan

ツール作成の背景

■ SGH以前から生徒の海外派遣を行っており、そこで「語る内容がない」ことが英語力以上に課題であることが浮き彫りとなった。加えて、グローバルな視点での見方や考え方、異文化理解が十分とは言えないこと、自分の考えを発表する機会が少ないことが生徒の課題となっていた。

■ こうした課題を乗り越える方法として、日本の歴史・伝統・文化をテーマとした「課題研究」を3年間を通して行い、海外でも「語る内容」を生徒に身につけさせること、また、海外派遣時も含め、定期的に課題研究の内容を発表する機会を設けることで、生徒の発信力を高めることを目指した。

SGH事業計画の流れ

1: グループ課題研究
スライド発表 (高1)

2: グループ課題研究
スライド発表 (高2)

3: グループ課題研究
報告書作成 (高3)

Do

ツールの解説

✓ 小さな発表機会を、全生徒に、定期的に埋め込む授業づくり

取組概要
成果

- 課題研究の研究グループ編成時に、各自の関心を発表する「1分間スピーチ」を実施。
- 「小さな発表会」と名付けた小グループ発表会を年に2～3回実施。編成された小グループでは発表に対する質問・助言を必ずすることをルール化し、聴講者にもアウトプットの機会をつくる。
- 年度末の発表会では、まずクラス相手に発表した後、他クラスの初見の生徒相手にプレゼンテーションを繰り返すこと、伝える力の向上を図る。代表者だけでなく、メンバー全員、ひいては全生徒がプレゼンを行う。
- 学校全体で、意見を言うこと、質問することが「当たり前」文化化し、普通の授業でも活発な発言がみられるようになった。

Check

取組内容の評価

- 当初は課題研究のアウトプットとして、8ページのレポート等を課していたが、現在は途中の報告様式、最終的な発表様式のすべてをスライド1枚に統一することで、「小さな発表機会」にあわせ生徒の負担を軽減し、かつ情報を精選する力や、情報活用能力の育成を図っている。
- 課題研究1年次には講義中心の授業で、受け身から脱することができない課題があったことから、R2年度は学年当初からグループ討議等を盛り込み、主体的に関わる姿勢の更なる育成を目指している。

Action

指定期間終了後に向けて

- 経験の蓄積から、校内で課題研究の「当たり前化」が進み、教員の助言負担が減少、班数の拡大が可能となった。
- R1年度に導入したICT化へのシフトが、新型コロナ対応下のオンライン授業で力を発揮。今年度の課題研究は大幅にオンラインシフトを実現した。